

## 大子町における「地域と教育」研究会活動の成果と課題

— 2年目を終えて —

池谷 美衣子\*

### はじめに

本稿では、ここまでの各報告を踏まえて、2年目を終えた大子町と本研究会の連携活動を総括する<sup>1)</sup>。本年度は全活動に参加した研究会メンバー（学生・院生・教員）がいないことから、まずは本年度の活動の全体像を俯瞰する。そのうえで、1年目（平成22年度）と比較して連携活動の変更点と大子町側の変化について検討する。最後に、今後の連携活動と本研究会の課題について、それぞれ考察を付す。

なお、1年目の活動報告と考察については、『筑波大学「地域と教育」研究会報』第2号（筑波大学生涯学習・社会教育学研究室発行、平成23年5月）を参照されたい。

### 1. 本年度の連携活動の全体像

各報告をもとに本年度の活動を俯瞰すると、表1のようにまとめられる。

本年度の連携活動は3回に分けられる。第1回目は小中学校の夏休み初頭に、各学校で行わ

れた補習（夏期講習）での学習支援と、児童による野菜収穫・販売活動への参加である。第2回目は、文化祭での学習成果発表の準備が行われていた「総合的な学習の時間」に入ってから学習支援である。第3回目は、秋に行われた小中学校の学校行事への参加である。3回を通じた本学からの参加者数は、記録された限り延べ57名であった。本研究会のメンバーは固定されていないが、教員・院生・学生を含め、多く見積もっても29名程度であったことに鑑みると、大子町に複数回足を運んだメンバーが多かったことになる<sup>2)</sup>。ただし、実質的な参加人数は把握されていない。

### 2. 連携活動の変更点と大子町側の変化

次に、前年度の連携活動との比較をおこなう。連携活動1年目であった前年度は、4月・7月・11月の計3回にわたって大子町を訪問した（参加者数不明）。前年度の成果物として、『筑波大学「地域と教育」研究会報』第2号（前掲）が大子町側の関係者に送付されている。

表1 平成23年度 大子町と「地域と教育」研究会による連携活動

	回数	内容	対象	参加数(延べ)
第1回	(7/21.22.23.24.25)	学習支援	2小学校(黒沢・さほら) 1中学校(黒沢)	24
		行事参加	1小学校(さほら)	8
第2回	(10/5.12.19.26、11/2)	学習支援	1中学校(黒沢)	14
第3回	(11/5.6)	行事参加	1小学校(さほら)	11
			1中学校(黒沢)	
合計				57

\*参加者数は、筑波大学教員・院生・学生の参加者計。

\*上記に含まれないが記録があるものとして、町内散策・研修参加等に延べ14名が参加した。

\* 筑波大学人間系特任助教

表2 平成23年度 大子町と「地域と教育」研究会による連携活動の特徴

- 1 中学校を活動対象に含めたこと（前年度は3小学校のみ）。
- 2 学習支援を行ったこと（前年度は行事参加のみ）。
- 3 行事参加では前年度の活動をすべて継続したこと。
- 4 学生・院生のみでの参加、日帰りでの活動を行ったこと  
（前年度は3回とも教員が同行し、1泊以上の連続日程で行った）。

### 2-1. 本年度の連携活動の特徴

昨年度からの変更点を表2に示す。これらの変更点は年度当初の計画段階で研究会メンバーの合意として変更された点に限らず、結果として変更になった点を含む。

表2より、本年度の連携活動の特徴として、活動の内容・対象がともに明確に拡大したこと、院生・学生（特に学生）が自立し積極的に参加していたことが指摘される。研究会側・大子町側の双方において、連携活動が評価されていると捉えられる。

### 2-2. 大子町側の変化

本年度の活動を通じて、1年目の連携活動の中で研究会側から行った提案や改善策が取り入れられ、大子町内の学校の教育活動に反映された様子を確認することができた。それぞれの変化はささやかなものであるが、研究会からの提案が生かされたことは継続参加者にとって驚きであり喜びであった。研究会からの素朴な提案を柔軟に受け入れていただいた大子町の関係者の方々に、この場を借りて感謝したい。

前年度関わった学校行事に見られた改善点について、本年度参加者が気づいた点を以下列記する。

◎ さはら小学校「親子ふれあいのつどい（餅つき）」「夢道場（野菜栽培・販売体験活動）」に見る改善点<sup>3)</sup>

- (1) 「親子ふれあいの集い」において、親子の会話・ふれあいを促す工夫が取り入れられた
  - ・父親とペアを組んで餅をつく時間が増えた

（前年度は、父親同士、児童同士のペアが多かった）。

- ・会食場所が学区内の4つの地区ごとで区分されており、親と児童と一緒に会食するようになっていた（前年度は、児童だけで先に会食し、その後親が会食していた）。

(2) 「夢道場」において、販売用の野菜袋に児童一人ひとりの手書きの手紙が入っており、名前・内容もそれぞれであった（前年度は児童の手紙がコピーされ、同じものが各袋に入っていたため、研究会から改善案を提示した）。

(3) 「夢道場」において、6年生を中心に、「さはらファミリー株式会社」が設立され、児童に責任をもたせる継続的な仕組みが作られた（前年度はなかった。研究会から「考えることを伴う体験活動への転換」を掲げて、「児童を本気にさせるしくみの必要性」を提起した）。

また、前年度には、連携活動の一環として「大子町教育ポータルサイト」の構築に取り組んだ<sup>4)</sup>。このサイトは、大子町立の全幼稚園・小中学校および教育委員会の公式ホームページ・サイトであり、各学校等がそれぞれ更新するものである。その後のポータルサイトの活用状況について、本年度はさはら小学校の教員および保護者に直接話をきくことができた<sup>5)</sup>。その内容を以下に留めておく。ポータルサイトの活用については、今後研究会として継続して取り組みたいテーマの一つである。

### ◎ 大子町教育ポータルサイトの活用状況<sup>6)</sup>

- ・さはら小学校のサイトはほぼ毎日更新されており、町内の各小学校では群を抜いて多い。更新は校長が行っているため決裁不要であり、速やかに更新ができています。児童の校内での様子を日々保護者に伝えることができ、保護者からの評価も高い。保護者からは毎日閲覧するという声が多く出された。同校のサイトには保護者世帯の10倍近い300近いアクセスがあり、保護者に限らず同校に関心を持っている人が多いということになる。
- ・一方課題として、学校側からすればどこの誰が見ているのか不安があり、内容や写真等には気を使う部分がある。また、大子町外の小学校のホームページと比較すると、学校の基本状況に関する情報が少ないことが指摘される。

ここまで整理してきた大子町側の変化は、1年目の連携活動の成果が具現化されたものであり、2年目の連携活動の中で発見することができたものである。その意味で、本年度の連携活動の成果が、3年目となる次年度の連携活動を通じて発見されることを期待したい。

### 3. 次年度にむけての課題

前節までの検討から、大子町と本研究会による連携活動は活動内容・対象・本学参加者ともに拡大方向にあり、大子町側・研究会側双方が一定の評価を与えていると総括できるだろう。連携することによって、大子町の教育活動にささやかながら変化への兆しが実感された2年目であった。

一方で、連携活動を進める上で重要な課題についても明確化したように思われる。ここでは、学習支援・行事参加の個別的な課題については個々の報告に譲り、筆者が最も重要と考える現行の連携活動の課題について考察する。

### 3-1. 学生側の「不完全燃焼感」

#### ―連携活動の課題

1年目の報告ではほとんど触れられず、本年度の各報告で共通して指摘された課題がある。それは、学生（院生を含む。以下同）が抱えた「我々に何ができるのか／我々は何をしてよいのか」という迷いや葛藤である。学生側の迷いや葛藤は、1年目でも参加者の感想として口頭では示されていた。しかし、本年度は各報告の中で文章化されている。

本年度初参加となった橋田・吉田は、報告の冒頭で「活動が子どもたちだけでなく地域や私たち大学生にとってどのような意味をもつのか」と問う。しかし、この問いは報告の中では解答されず、問いのまま残されている。また、中学校での学習支援に通った小林は、中学校側と学生との間で「学生が教室に入り込むことの目的や役割を具体的なイメージとして共有できていない」ことが、学生側の不安を引き起こしていたことを明らかにしている。学習支援では、日常的に関わっていない学校現場の中で、関係が形成されていない教員や生徒を前にして、学生は「何をしてもよいかわからない」状況に置かれていたことが看取される。ただし、それだけで葛藤が引き起こされるわけではない。特に何もしようとせず、適当にやりすごすという選択肢もありうるからである。報告の中で、小林が「どのようにすれば生徒にとってより良い学習になるのかについて頭を悩ませていた」と述べるように、また、同活動に参加した呉が「生徒とのコミュニケーションを十分に取れず、信頼関係の構築に影響を与えた」と評するように、学生の側には、学習支援活動として行われる以上は効果的（だと少なくとも学生自身が思うような）学習支援を行いたいという積極的な意思があった。このような積極的な意思と実際にできることの不明瞭さないし少なさとの間で、学生側は「何ができるのか／何をしたいのか」という葛藤を抱えたものと考えられる。

また、酒井・森は行事参加を通じて「学生が『お客様』であり過ぎた」と指摘している。学生は「全てが用意されたイベントに投げ込まれ

るだけ」で、「どこまで能動的に動けば良いのか、どの場面で積極性を発揮すべきなのか」が分からず、指示待ちにならざるを得なかったという。この状況に対して、酒井・森は「ただ何となく楽しかっただけ」では、『『大学生』として、今回の連携事業に参加した意味は見いだせない』と言明する。ここにも、楽しいでは満足せず、『『大学生』として参加した意味』を求めようとする積極的な意思を看取することができる。

報告の諸処で言及された学生側の葛藤や不満は、本年度の特徴として指摘した学生側の積極的参加に関連していると推測される。学生側の関わりとして、率直に言えば1年目は概ね大子町の概要理解と学校見学・行事参観に終始した。これに対し、2年目は学生が自立して大子町に通うようになっており、「もっと積極的に関わりたい、何らかの役割を果たしたい」という主体性発揮の場をより強く求めるようになったといえる。しかし一方で、学生が主体性を発揮するための場や条件は必ずしも与えられず、そのギャップに葛藤を覚えて2年目が終わった。学生側に残されたこの「不完全燃焼感」が、本年度に顕在化した新たな課題として指摘される。

学生に対する教育的意図としては、故郷でも現住地でもない大子町という地域やその小中学校に出向くことで、偶発的なものも含めてさまざまな経験や出会いをすることが期待されているものと推測される。それ自体に異論はないが、「何でも経験しておくのは良いことだ」というだけでは、(その考え方は否定しないが)学生側の「不完全燃焼感」への応答にはなりえない。学生側の「不完全燃焼感」が問うているのはそこでの経験の質であり、もっと言えば経験に対する主体的関与の要求であると思われる。

筑波大学と大子町との包括協定という枠組みの中で展開される本連携活動では、学生に対する「参加なき動員」が生じやすいという傾向を内包している。したがって、連携活動として、学生に対する「参加なき動員」を回避する方が意識的に模索される必要が指摘される。次年度の具体的な課題として、少なくとも学生側が「不完全燃焼感」を抱えていることを大子町関

係者がどう受け止めたのか、学生との一層の対話を求めたい。

### 3-2. 「不完全燃焼感」との向き合い方

#### 一研究会の課題

次に、「不完全燃焼感」を抱える学生側の課題について考察する。なぜなら、筆者は学生側の「不完全燃焼感」という課題の中心が学生側にあるのではないかと考えるためである。

学生にとって「不完全燃焼感」を抱えることは苦しいことであり、その状態が続けば活動参加へのモチベーションを低下させることにつながる。一方で、「不完全燃焼感」は活動参加への原動力として働く積極的側面も有している。「完全燃焼」できなかった部分があるからこそ、本年度の連携活動を踏襲するだけでは物足りず、連携活動に対して考察を深めたり、改善策を考えたり、継続して参加しようと思うことにつながるからである。葛藤を抱えながら関わり続ける中で問題意識やアイデアが生まれることもありうるし、「楽しいだけ」の経験が後々意味をもつことも十分にありうる。「不完全燃焼感」を解決するために、学生にとって「今ここ」での参加の「意味」や果たすべき「役割」をあらかじめ限定することは、連携活動のもつ様々な可能性を捨象することにもなりかねない。「経験から導き出される学習や経験の本質は、目的的な意図に関連するというよりも、より主観的な意味づけや解釈に深く関わっているものなのである<sup>7)</sup>」。この意味で、「不完全燃焼感」という課題は、連携活動の内容やしくみの変更によって解決されるというよりも、学生自身が向き合うものとして再定位することができるだろう。

では、不安や葛藤を次なる活動への原動力にしていくためには「不完全燃焼感」にどう向き合えばよいだろうか。この問いに対して集団的に取り組むのが、本研究会が果たすべき役割であると考えられる。

本会報に掲載された活動記録に明らかなように、本年度の研究会活動は、一部を除いて、概ね大子町に行って活動しその内容について研究会で報告するという循環で構成されていた。研

研究会中で取り上げられるのは大子町での経験がほとんどであり、関連情報の提供や先行研究、他地域での事例等について検討する機会はなかなかないのが現状である。しかし、大子町との連携活動を進めていく上で、大子町の歴史や基本政策、茨城県の教育政策に関する知識は、考察の前提となる基本情報として欠かせない。また、全国的に問題になっている中山間地域における地域振興や、少人数教育・体験学習等に関する研究動向など、関連分野の文献を通じて学ぶことも必要になる。大子町での連携活動についての考察を深めていくためには、実際の活動に参加するという軸とは別に、関連領域を広げながら知識・情報の厚みを増していくという行為がもう一つの軸として不可欠である。各報告において、積極的に関わりたいという意味はあるのに「どうしてよいかわからない」という葛藤が経験談以上へと昇華されないうる要因の一つは、このもう一つの軸に関する作業が不足しているためであると考えられる。

「不完全燃焼感」との向き合い方、すなわち自分の限定的な経験にのみ依拠するのではなく、厚みのある知識や情報を総動員して行われる考察の深め方を習得していくことは、学問と実践を往復する中で経験可能な「学び方を学ぶ」プロセスとして換言される。学生が大子町との連携活動に関わる意味は、こんなところにも見出すことができるのである。2年目の連携活動を通じて発せられた「我々に何ができるのか」「連携活動が学生にとってどのような意味をもつのか」という問いに応答するのは、あくまでも問いを発した学生側に他ならない。3年目の活動の中で、それぞれに深められていくことを期待したい。

## 注

<sup>1)</sup> 本年度の連携活動は、前年度で用いたフィールド調査という表記ではなく、学習支援活動という表記で事後的に統一された。しかし、実際の活動内容は、教科に関する補習および授業内で行われた学習支援と、学校行事への参加という2つに区別して捉えられるものであると考える。したがって、本稿では本年度の活動全体については「連携活動」、活動内容については「学習支援」・「行事参加」と表記する。

<sup>2)</sup> 本研究会はメンバーを固定しておらず、毎回ポスターを掲示して関心のある学生・院生を受け入れている。一度でも参加した学生に対しては、研究会開催通知をメールしており（但し、当該年度内で希望者のみ）、本年度は29名に通知されていた

<sup>3)</sup> 「地域と教育」研究会で発表した第3回活動報告「さはら小学校訪問から見たその魅力及び課題」（2011年11月17日、報告者酒井大二郎、池谷美衣子、賈燕妮、于森、鄭姨華）による（賈担当部分）。

<sup>4)</sup> 大子町教育ポータルサイト

（<http://www.daigo.ed.jp/>、2012年4月28日取得）。

<sup>5)</sup> 第3回調査のさはら小学校での保護者懇談会でのインタビューより。懇談会の詳細は以下。11月5日の14:30~15:00、於校内図書スペース、参加者は6年生の保護者12名（男性6名、女性6名）および教頭、清水指導主事と研究会参加者6名。

<sup>6)</sup> 注3に同。

<sup>7)</sup> タミー・J・フレール（金藤ふゆ子訳）「身体を通じた学習」シャラン・B・メリアム編（立田慶裕ほか訳）『成人学習理論の新しい動向—脳や身体による学習からグローバリゼーションまで』福村出版、2010年、p.64。